

あそ

7

2010



荻窪団地



遅八刻 「保多孝三展」(篆刻美術館刊)

ち はちこく
遅八刻 「人生も長い長いと思っていても、いつの間にか終わりが近づいています。気がついた時にはもう「遅八刻」、到底間に合いません。」といふ恐ろしい言葉です。禅の言葉です。

「大島蓼太の門人「魚汶」が明和八年、師を批判した砂岡雁宕の「蓼すり古義」に対する反論書「遅八刻」をあらわした」とある。知られた禅の言葉であったようです。

作品は昭和三十三年日展出品作品です。年譜によると先生五十歳、この年都立城南高校を退職。日展会員になられてゐる。

刻跡の何かに抗ふように見えるのは私だけであらうか。

あそ

七月



南 溟

いくたびも死なぬ病を紅ざくら
歩かない革靴履きて花の道
しやぼん玉の影のよぎれる晝の夢
急ぐとき青大將はまつすぐに
尖塔に南溟の雲蝟集せり

本町三 佐藤喜孝

宝仙寺前 芝宮須磨子

姉がりは残雪光る甲斐の里
ふるさとは富士の残雪輝くと
雨あがりジャスミン匂ふ路地の家
防衛庁官舎昼顔咲かせしづまれり
マロニエの花たしかめに坂のぼる

網 針

つるぎぢひだしで
劔地東出

定梶じよう

網針が膝りあたたか目の出来く
菜の花の日曜行きて弥撒聴かな
遅刻子へ麦の黒穂ののびあがり
公然の秘密虻に螫されしこと
どた靴や詩を得んために青き踏み

奈 良

所 沢 須賀敏子

若葉影唐招提寺芭蕉句碑
緑さす若草山をゆつくりと
石楠花や女人高野は奥の奥
観音の御足にふれて牡丹寺
牛蛙遠くに聞いて明日香の夜

本町三丁目 鈴木多枝子

咲ききって力緩める滝桜
六月の青銅めける箱根山
小雀の蝶になりきり降り来る
洋も和も蒲公英綿毛同じかな
ふる里の筍尽し飽きもせず

人参の花

浦 和 竹内弘子

春深し池に居着きし渡来亀
外堀はむかし埋められ心太
高階の水音八十八夜かな
人参咲き愛憎にぶくなりけり
目を洗ふ水なまぬるし枝蛙

熱気球

終日をショパン聴きをり薦若葉
夏野原影曳きずって熱気球
わが饒舌蛙ひばりを凌ぐらし
汗ばみて頂上に着くお富士山
降り出して定家葛の匂ひけり

田端 田中藤穂

三光坂 東亜未

露天風呂ぎしりと重し菖蒲束
青煮それといふいきほひの渋うちは
風青しハローコンニチハの隣人
禿ちよろのテラス手摺に柿の花
聖五月火鉢の灰を洗ひ干す

桐の花

揺する風撫でてゆく風桐の花
堂の赤花桐淡き色ちらす
目を瞑り黙しゐる男桐の花
鳩集ふ喇叭奏でる桐の花
香り満つ花桐の下長居して

富田 長崎桂子

大宮 早崎泰江

たかんなの伸び森閑と竹林
樹の洞に出入りはげし蟻の列
夕暮れの田に残されし余り苗
田の水に湧きでるごとし蝌蚪の影
父母の面影遠し更衣

ゴールデンウィーク故郷とはハーモニカ
告白は薔薇の真っ赤な日でありし
衣更へて市井の妻になりきれず
青葉若葉無色の風を袂にす
同じ道通るのはいや猫の恋

佐伯祐三記念館

盛り上がる如くに若葉光りけり
祐三のロマンを秘めて若葉風
祐三のアトリエを覩て紫蘭みる
若葉中巢箱のペンキ新しく
記念館ベンチの実梅そのままに

夏の風邪ひとり静かに生姜湯
しゃべるだけしゃべりまくって夏座布団
そら豆や三点倒立ヨガ修行
目の下も味はふ真鯛走り梅雨
やさしさを呼び覚まされししゃぼん玉

遠出して嬰に傾げる日傘かな
めまとひの弄びたる青空を
指鉄砲にしとくか憲法記念の日
春の月またたき金星ゐざり来し
花見つつ徒寝^{いたづらい}ねとなる夜かな

図書館にて

膝の子に父静かなる読み聞かせ
時代小説母に探せる傘雨の忌
葉の間の細き枇杷の実黝し
紫蘭揺る「この道」を聴く昼餉時
新樹光髪切りて子の出勤す

清瀬 赤座典子

聖蹟桜ヶ丘 安部 里子

風薫る飼猫出すなどおふれあり
子は五人父母の法事の五月富士
君おはす紫蘭群落ざわめきぬ
五月闇内なるをろちさわぎだす
鴉の子杉の梢の揺りかごに

曳舟 遠藤 実

電線に慣れきってゐる夏燕
ビルの間にどすんと大暑来りけり
夏落葉八角堂のぐるりかな
雲の峰弁財天は膝立てて
嘘一つ上手につけて星涼し

逗子 鎌倉喜久恵

真夜中も青空はあり薔薇青し
蒼空を恋ひて散るなりえごの花
垣こえて咲きこぼれをりバラに棘
なにげなく人に添ひたい春愁ひ
菖蒲湯をたてひとりなりのしかり

モーニングコールは浅漬の夏野菜
酔うて寝て目覚む五月の東雲に
男爵もクインも道産子夏来る
鎌倉やいのちを芽吹く大いてふ
六ぐわつの氣圧の谷に滑り落つ

うぐひす

寿福寺の箒の音とうぐひすと
ご朱印の乾くあひだの白牡丹
赤き薔薇北条政子の墓強し
うぐひすに上手下手あり虚子の墓
血圧を下げるうぐひす鎌倉山

柿若葉気づかぬほどの雨が降る
春昼の部屋を灯せばなほ暗く
朝の雨切れよくあがり柿若葉
蓮の葉のためらひがちに裏返る
聖五月転ばぬさきの杖持ちて



前月作品

花の屑けふはいっぱい遊んだね	朝桜人の数だけ犬の数	山ざくら天上へゆく道しるべ	囀をこぼさぬやうに句帳閉づ	投票所桜吹雪の中に立つ	大阪城を確と浮べて春の闇	空いちめんにぎにぎしきや芽吹晴	青麦や息み伸びする赤ん坊	さまざまな引出しをもつ春の宵	青麦の穂先に少女ふれゆきぬ
篠田純子	木村茂登子	鎌倉喜久恵	遠藤実	安部里子	赤座典子	吉弘恭子	森理和	森山のりこ	早崎泰江

喜孝抄



一人一句

春燈は雨の鐵路のむかう側	大根を買ふ献立を考へず	童等は両手ひろげて落花かな	驚馬のあくび麒麟にうつる日永かな	花冷やしフォンケーキの泡たてる	ブロック塀一匁欠けて雪柳	柿の木のあたり小暗し春のくれ	アルパカの親子のまぶた春の雲	三味線草膝こぞ揃ふ昼餉かな	春夕べ鐘の余韻の棚引ける
佐藤喜孝	芝尚子	芝宮須磨子	定梶じょう	須賀敏子	鈴木多枝子	竹内弘子	田中藤穂	東亜未	長崎桂子



六月作品より

吉弘恭子

春燈は雨の鐵路のむかう側

佐藤 喜孝

春の雨は静かさをまし時にこちよいものだ。線路を挟んでこちらと向こう側、景色が全く違うところがある。「春燈」は向こう側といっているので華やいで見える燈火のこちら側は何となく淋しいよと、作者は思ったのであろうか。心証は分りがたいが、奥行きがあり「雨」のつかいかたが絶妙にきいている。もしかしたら車中からの景かとも思ったが。いい句に出会ってもっと勉強せねばと、しかと思った。

青空でぶらごを置く水溜り

芝 尚子

ぶらんこに近づくときよくわかるが、いつの間にか土が凹んでしまっている。漕ぎはじめ、止まって降りるときにはどうしても同じところに足がいく。そのくり返していつの間にか地面の土が持っていかれてしまふ。雨上がりの真つ青になった空と子供達を待っている

るぶらんこを置いている水溜り。水溜りに映っている両方を置いているとはなかなか言えるものではない。

絞った形に雑巾乾き四月馬鹿

定梶じょう

小学校では今雑巾がけをしているのだろうか。男の子たちは雑巾がけをするにはするが、早く帰りたいので絞った雑巾をそのままにして帰ってしまうことがあった。この句は学校ではないようだ。拭き掃除が終わった直後に何かの用事がおきて、絞ったままに忘れてしまった。そこまでは通常の良くあることであるが、季語の幹旋が面白かった。茶化しているのか、戒めているのかどちらなのか作者に聞かないと分からないが「四月馬鹿」が上手い！

日の射して千本桜目覚めけり

須賀 敏子

夜桜という言葉があるように夜の暗い中に咲いている桜も静かでもいいものだ。ところが日が射してきた途端に静かさも吹き飛び、何と艶めかしく咲き誇っている

るではないか。桜にも目覚めがあるようだ。「目覚め」という言葉だけで昼夜の桜を想像させて貰い面白かった。

全身に菜の花の黄を貰ひけり

鈴木多枝子

写真だけでしか見たことがないが、菜の花畑は一度は行ってみたいところだ。腰くらいはあるのだろうか。さぞや菜の花の香りに溺れたことだろう。その上に花粉まで全身に頂く恩恵にあずかった。さぞ至福の一日であつたことだろう。「貰ひけり」が眼目、面白かった。

春風を吸ひこんでゐる土竜塚

田中 藤穂

農業を営んでいる人にとって土竜は大敵。土竜打ちという言葉があるくらいだ。都会に住んでいると土竜を目にすることは殆どないが、土竜塚は公園などで見かける。こんもりと盛り上がっている土があると、この下に土竜がひそんでいるのかなと興味が湧く。あの盛り上がった土は、春風を吸っていつぱいになった、ふんわりと土を膨らましていると想像しただけでも面白。楽しい作品になった。

抱かれて泣きやむあかご春の雲

森 理和

赤ん坊は泣いても笑っても何処の赤ん坊も可愛いものだ。世のことを何も知らない赤子にとって抱いてくれる人はこの世の天使かも知れない。誰でもよくはないがとりあえずは……。俳句は季語が大事といわれるがこの句もまさしくそれだ。春の雲の柔らかさが乳呑児にはピッタリ。

地図を手にまだうろつろと春の夢

赤座 典子

大阪の造幣局の桜を見に行かれた折の句。いろいろご覧になられたのだろうに、お帰りになつてみた夢が地図を手にのようだ。心残りがあったのであろうか。「まだ」がいい。使い方によっては生な言の葉であるがこの句の場合は活きている。使い方によっていきいきする時と駄目なときがある。心して言葉を選びたいと思っている。

近世俳諧と漢詩文

参拾二

王 岩

七夕夜 詩人に逢て

露は今宵より白からん銀河

支考

支考の句で、句題から分かるように漢詩人に逢った時に詠んだ作品である。杜甫の五言律詩「月夜憶舍弟（月夜 舍弟を憶ふ）」の頷聯を翻案した部に、下五「銀河」を配したものである。

露従今夜白、

露は今夜より白く

月は故郷明。

月は是れ故郷に明るからん

今宵から白露の季節になり、月光が故郷をも明るく照らしていることだろう。家族と共に漂泊の生活を送り始めた頃の杜甫が詠んだ詩句である。句題で分かるように、支考が七夕の夜、漢詩人を相手に詠んだ句だ。美しく明らかに輝く銀河を見遣って、「そうか。今夜から露が白く降りる季節になったんだね。」と漢詩を上手く翻案したうえで、挨拶としての句を組み合わせたのだ。

支考・夏の句

卯のはなや夜深に繋ぐ市の牛
魂棚にこちらむく日を待身かな
蜘蛛の巣の夕暮ちかし蟬の声
立山や剣を前に夏氷
涼風や新酒をおもふ蔵の窓
蜻蛉と我とあそびて薄着かな
風鈴や秋を触行市の中
鶯や今法華経の土用干
蓮の咲かぬ寺こそなけれ新潟は

六月は空鮭をがめ鯛よりも
筋違に寐て涼しいか佐渡の山
冷汁や鉢にうかべる帆かけぶね
木まくらは脇にすゝみて軒哉
五月雨に名月ありとしらなんだ
しゆろの葉の団扇に涼し法師ぶり
さみだれや雲雀啼ほど晴て又
南瓜の花や見捨ててふらり坊
右の手の左うらやむ田うへ哉
ゆりの花生ければあちらむきたがる
出女の口紅をしむ西瓜哉

あをかき集

竹内弘子選



佐藤 喜孝

姉さんと余所のねえさん春の家
春の風姉さんの子を連れて出る
姉さんに離れて父は鰯を煮る
姉さんを泣かせし春の昼のこと
姉さんを怒らせてゐる半仙戯
指太き父は胡座で目刺食ふ
種浸す遙かより来し水引きて

遠藤 実

次の世にすることにして藤寝椅子

御握りの丸や三角青田風

森山のりこ

五月来るシヨパン生誕百年祭

溪谷を埋めて千余の鯉幟

毎日が母の日なれと願ひをり

遺伝子の話長々梅雨の月

赤座 典子

夏寒しだし巻玉子頬張りぬ

柿若葉不用となりし乳母車

蛭狩のあまりに早き案内かな

田中 藤穂

白雲や昨夜ありしとふ薪能

文政の天水桶へ椎の花

片栗のこれほどにまで花の反り
買はうとする栄螺よ蓋を閉ぢてけり
散るといふことを万朶の花怵ふ
蝌蚪の田に遠足しばしとどまれる
挿す瓶の首が細くてチューリップ
夏蜜柑あんたがどこさ唄ひし頃

定梶じょう

蒼楓二人の会話近づき来

芝 尚子

踊子草風抜けてくる雨あがり
きやら露の煮つまるしじま晝の雨
たんぽぽの絮をけ散らし一輪草
叩いても出ぬ罐ジュース五月祭
幾度も黄色い口に親燕
現役の世にさわがしき五月かな
襟足に滴りの叱咤虚子の墓
只働くだけは蟻は考へず
走り梅雨思ひ出せないけど会釈
流れつく先はいづこそ夏落葉
猫の子に顎さはらる日和かな
母の背をすっぽりつつむ春日差
押入れに頭つつこみ夏探す
おゝかたはまだ行かぬ道木の芽みち
牡丹咲く寺の賑はい寅まつり
ポンポンと壁打ちテニス夏来たり
花冷や缶コーヒ―で手を温め

薯植ゑる藁灰顔にもろに受く
史実読む石佛堂塔青葉風
雨蛙通夜の歸りをひそひそと
豆乳を一日一杯走り梅雨
投票場六年生は日輪草
風薫る坂の真中音楽堂
薔薇の園とげありしこと忘れをり
矢車草カフエテラスの窓越しに

長崎 桂子

森 理和

東 亜 未

早崎 泰江

芝宮須磨子

鎌倉喜久恵

吉弘 恭子

須賀 敏子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

鈴木多枝子

選を終えて

蝌蚪の田に遠足しばしとどまれる

じょう

田圃に沿った道を歩いている遠足の子供たちが蛙
の子を見つけたのでしよう。田をのぞき込んで頭か
ら落ちて、池とちがって泥んこになるくらいだか

ら危険は少ないでしょう。

挿す瓶の首が細くてチューリップ

〃

「チューリップ」の茎はさほど太いとは思いますが、根の方が幅広の葉に被われているので花瓶を扱ふことはたしかです。口径の広いシンプルな瓶がいかもしれせんね。

姉さんと余所のねえさん春の家

喜孝

なぜか、今月は「姉さん」の入った句が七つもあり「余所の」とありましかから、入り混って遊んでいるのだと思いました。

春の風姉さんの子を連れて出る

自分の実姉ではなく、よその女性に親しみをこめて「姉さん」ということもある。この場合は同居しているお姉さんの女の子のようです。

姉さんを怒らせてゐる半仙戯
姉さんを泣かせし春の昼のこと

〃 〃

何がどうして「姉さん」を怒らせ、泣かせること

になったのか、自分の「姉さん」か「余所の」姉さんか、よく分りませんが、ある情感のようなものが伝わってきて、悪くないなあと思っています。

次の世にすることにして簾寝椅子

実

どんなことか、心に懸かっている手が付かない、取りかかれない、後回しにしようということや、或る日ふと「次の世にすること」にしたということです。

鷹が空を飛ぶように何物も恐れず悠然としていることを鷹揚というそうです。こんなふうでありたいものです。

夏寒しだし巻玉子頬張りぬ

典子

厚くて深めの卵焼器に、鰹だしなどでよく溶いた卵液を、すこしづつ何度か入れては裏返し、ふっくら厚い「だし巻き玉子」をつくる。

厚みがあるから、一切れでも頬張る感じになる。「夏寒し」がいいと思いました。

柿若葉不用となりし乳母車

〃

子供たちが大きくなつて不用となった乳母車。捨て難く、軒下でしばらく子供達の遊び道具になっていた。この頃は電車にも乗れるスリムなベビーバギーばかりだが、俳句には向かないようだ。

〈乳母車夏の怒濤に横向きに 多佳子〉

文政の天水桶へ椎の花

〃

五月の中頃、千駄谷の鳩森神社へ吟行した。境内にはいると、昨夜の「薪能」の立札があり、木立を背に三方をあげ放した能狂言の舞台が現れた。昼ない暗い鬱蒼とした夏木立と黒っぽい社殿に対して、白木造りの能舞台は眩しいばかりでした。そのような光景がこの句から甦りました。

江戸後期、いわゆる文化文政年間の「天水桶が二百年後の今もあるというのです。

谷中辺りにありそう。板を並べた蓋があるのもいい。「椎に花」が散りかかるのも寺町らしい。小桶が幾つも伏せてあると面白い。

きやら露の煮つまるしじま晝の雨

尚子

白雲や昨夜ありしとふ薪能

藤穂

初心の頃

と 白選十句



虚子 筆
'09. 4. 19.

路の茎を醤油で伽羅色になるまでにしめたものが
きやら路です。日暮里の駅に近い中野屋の蚕豆と伽
羅路はそれはおいしいものです。

叩いても出ぬ罐ジュース五月祭

茂登子

むかし娘たちが、大学の五月祭に行くとき騒いでい
たことを想い出した。「叩いても出ぬ罐ジュース」
は飲料水の自動販売機に硬貨を入れ希望の飲料のボ
タンを押したのだがいつかな出て来ない。販売機を
叩いても出てきません。省略を利かせた句です。

おゝかたはまだ行かぬ道木の芽みち 喜久恵

世界地図を見ても、赤く塗られていなかったら
ぐにはそれと分らない日本列島は、アジア大陸の東
側に沿って、北海道、本州四国、九州ほか、幾つも
の島からなっているので私も「まだ行かぬ道」の方

が多いと思います。

牡丹咲く寺の賑はい寅まつり

敏子

紫陽花寺とか萩寺とかあるので、さしずめ牡丹寺
でしょうか。「寅まつり」は干支の寅でしょうか、
例の「花も嵐も寅次郎」の寅さんなら、柴又の帝釈
さまですね。

吟行案内

場所 東大 三四郎池 ほか

集合日時 8月21日(土) 十一時

東京大学赤門前

丸ノ内線・大江戸線 「本郷三丁目」

南北線 「東大前」

参加希望者は八月十七日まで 幹事・佐藤喜孝

090-9828-4244

葭焼の戦火に見ゆる目眩かな
筋骨隆々のメタセコイヤに風かがやく
ふらここをこつそり漕ぎて誕生日
銀座八丁けだるく芽吹きそめしかな
小夜更けてしだれ桜の泣きじやくる
間違ひを起こして了ふ田螺かな
にんげんに番号のあり獺祭
冷たさの肺に残れりみどりの夜
白鷺の五羽居てどれも閑らず
最上部で軋む薄暑の観覧車

篠田純子

三十代と四十代は本当に忙しく、精神的にも大変な思いをしてつらい日々だった。四十代も終りの頃、中野に住む友人が近所の「傳」という喫茶店で俳句を始めたという話を聞いた。私も連れて行って欲しいと頼み、平成十一年の六月、生まれて始めて俳句とふれあった。それ迄も祖父や伯父の短冊を見たことはあってもちつとも感動しなかった。唯一、祖父の辞世の句が肖像画に書かれ、掛軸になっているのを母の実家で見た時は面白いと思った記憶がある。

さて俳句をはじめてみると自分を曝すようでもちも恥かしかった。反面、過去の苦しみや句に表現することで昇華していった。幾つになっても、人に評価されたり誉められたり（滅多にないが）すると嬉しく励みになった。教えを請えば先輩の俳人の方々は、惜しげもなく指導して下さる。（日々感謝している）。但し「仲良しクラブ」ではない事は、これからも肝に銘じていこうと思っている。

冬空にぬつとクレーンの突き出せり
凍道や窓辺の猫に威嚇さる
立てられし畝の並びて浅き春
街中や鶯の声つゝぬけて
薫風や石像の犬撫でてみる
夏初め魁夷の青を着てみたし
竜舌蘭空に咲きしを眺めをり
朝顔の涌きでるやうに咲きのぼる
年新た小さき庭に夫と立つ
水仙の一センチ伸び青き空

山莊慶子

竹内弘子さんに誘って頂いて俳句を始めました。明確に記憶していませんが大分前のことです。その頃全く経験のない俳句に四苦八苦しながら奨められて下手な句の「獐」に投句するようになりその後「あを」にお世話になりました。仕事が忙しくなり他にどうしてもやりたい事も出来、それに熱中し俳句から全く遠ざかりましたが、心の片隅に俳句への思いは残っていました。

夫が病に倒れ、介護の日々を過ごすようになり、調句会に毎回途中で退席し迷惑をかけながら参加し、「あを」に投句させて頂くことになりました。今何とか続いているのは調句会の竹内さん、「あを」の佐藤さんお二人の優しさで忍耐、句会の皆様のお力添えに依ると思っています。

未だに初心者ですが僅かでも向上していきたいと思うこの頃です。

富士塚

佐藤喜孝

白雲と新樹の距離を目で測る

青蔦やところどころにガラス窓

手を使ふところも富士塚登山せり

富士塚涼風足の置場も江戸ゆづり

富士塚に徑の交はる松の芯

菖蒲田の端の黄花は野の育ち

菖蒲田の西行櫻葉っぱのみ

竹植ゑて人を待ちたる後の世に

筍や潜水艦が下通る

琅玕は密にして疎に風涼し

青天や脱ぎそこねたる竹の皮

手をもちゐ石の間の夏落葉

螳うごくは蟻の影ばかり

大石に青葉の影のあをくつきり

木もれ日のゆらぐ地面も夏となり

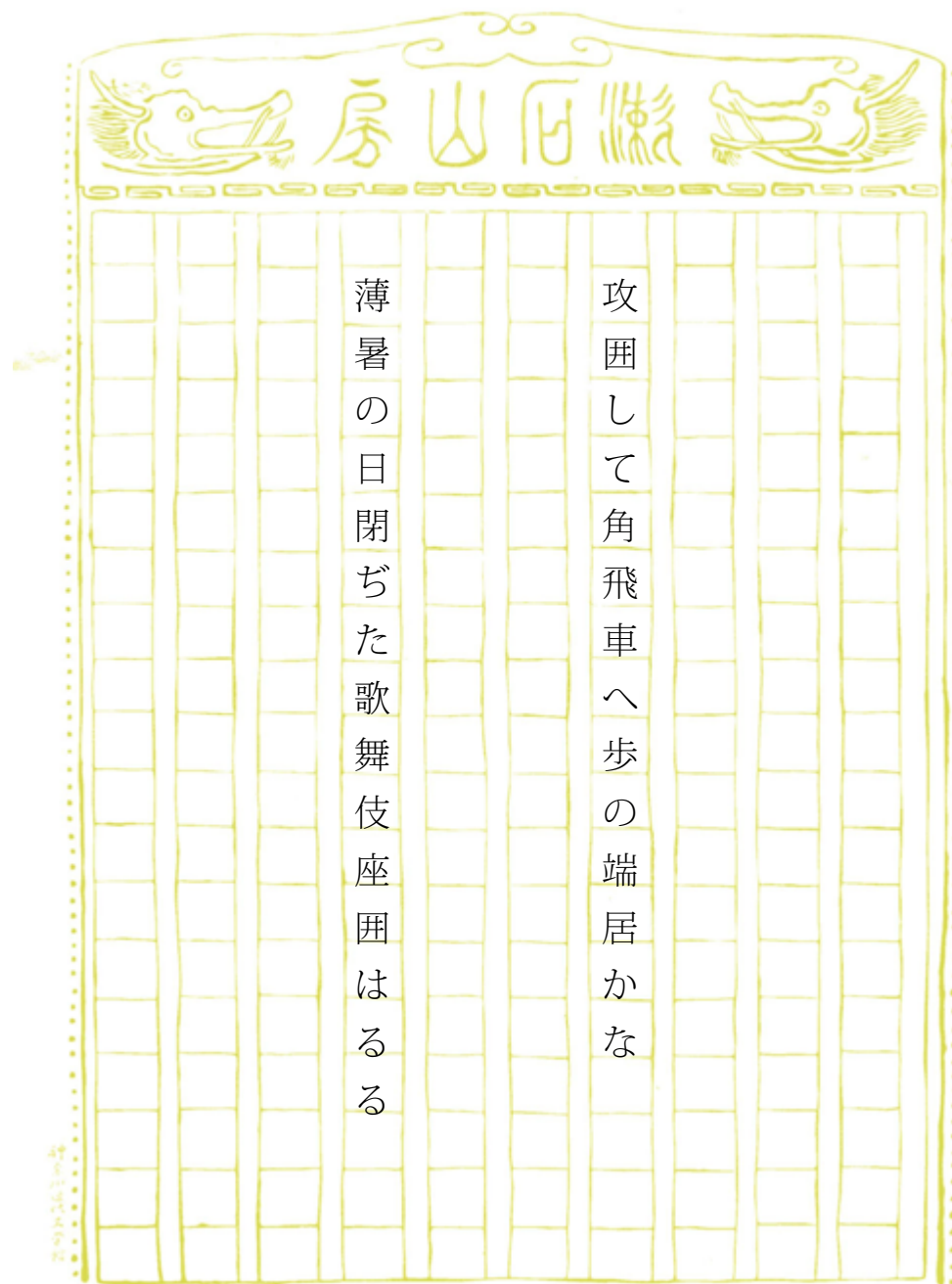
新樹の奥濃き新樹あり馬の音

木の花の白のさかりに騎乗の背

太陽の方から風が椎若葉

飾り馬緑の中にさみしがる

萬緑に穴をあけたる大鳥居



あを柳集

兼題 囲

佐藤喜孝 選

囲の本字は圍。見た目は大分違ふ。漢和辞典には「圍」の成り立ちは書かれてゐるのだが、「囲」の形になった由縁は全く書かれてゐない。形の履歴が分らない字をみんなで使つてゐることになる。この兼題は拡がりが少なく皆様もご苦勞なされたやうである。

攻囲して角飛車へ歩の端居かな

将棋の盤面の話。包囲ではなく攻囲とは烈しい棋風である。「飛車角」は耳に馴染んでゐるのだが、「角飛車」はおやつとおもふ。これも作者の作戦かも知れない。この緊迫した盤面に端歩とは心憎い落ち着き様である。端歩を端居と見立てた俳句魂に感服した。

薄暑の日閉ぢた歌舞伎座囲はるる

今年歌舞伎座は改築のためさよなら公演を興業、私の周りでも多くの人が歌舞伎座へ行かれた。その華やかな歌舞伎座も千秋楽を終へると解体のために足場が組まれシートで目隠しをされてしまったのかも知れない。哀惜の情を押し殺し淡々と伝へてゐるところがよい。

題詠 卅

(順不同)

囲いから大きく枝垂れ滝桜

鈴木多枝子

滝桜円く二重に囲はれて

春昼や胸囲をはかる腰の紐

吉弘 恭子

囲碁将棋中途半端に覚ゆ春

包囲網すつかりとけて春兆す

いく重にも囲むさくら草の群れ

攻囲して角飛車へ歩の端居かな

樺の忌囲みのなかに伏せしもの

囲碁将棋煙管繕ひ囲炉裏端

森 理和

カフェテラスぶどう青葉に囲まれし

田中 藤穂

手囲ひの螢を闇へ放ちけり

青葉寒師を囲む会なくなりて

赤ん坊とり囲みたる夏座敷

味噌を焼く五月の囲炉裏賑はひて

長崎 桂子

夏の星弥かがやくや苗囲ふ

永き停電愉しむごとし囲炉裏の焰

定梶じょう

山音のつる囲炉裏火祖父がゐて

藁囲ひせし鉢の木瓜時に覗く

船虫の重囲の中に立ちつくし

狛犬も囲いの中に三社祭

木村茂登子

五月雨の中普天間を囲む民

春ふかし囲みとかれて棺出づ

竹内 弘子

大皿のサラダを囲むプチトマト



三囲神社へ詣でしことも花の頃
 花ちるやかごめかごめと囲まれし
 囲碁将棋つひに覚えず春行けり
 薄暑の日閉ぢた歌舞伎座囲はるる
 篠田 純子

打水や囲いの深き金田中
 飯囲ひひよいとひととび鹿母子
 東 亜 未

椶の芽に囲ふ柴垣なきがごと
 朝顔の鉢が圍繞す永蟄居
 佐藤 喜孝

鴉の子鴨鳩雀に圍まるる
 ぶらんこをひねもす漕ぎで圍を出でず
 人體を電波が包圍椎の花
 早池峰の膝下のごとく大圍爐裏

五月の句会

傳 中野区 カフェ傳

あを吟行会

鳩の森神社

連句勉強会 毎月第2日曜
 希望者は左記まで (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
 カフェ傳 森 理和
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
 岸町公民館 竹内弘子
 (0488-86-3501)

あを吟行会
 詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜
 小川苑 吉弘恭子
 (090-9839-3943)

春昼や部屋を灯せばなほ暗く
 逆縁の母にも母の日が巡り
 爪切と薙のたね小抽斗
 愚図愚図と街に川あり姫女苑
 やさしさを呼び覚ませししやばん玉
 篠笛をひようと吹き切り春の月
 天の川見てある我は星の中
 蝌蚪の紐一つほぐれて泥けむり
 金蠅のそつと隠れる山つつじ
 わが饒舌蛙雲雀を凌ぐらし
 春耕の土にぎやかに雀の子
 古今集のかなの流れも夏衣
 芝椋ドミノ倒しのごとく咲き
 ご朱印の乾くあひだの白牡丹田
 柏餅粒より漉より味噌の餡
 指鉄砲にしとくか憲法記念の日

尚 子
 寒 林
 弘 子
 喜 孝
 理 和
 綾 子
 文 子
 喜久恵
 美代子
 藤 穂
 泰 江
 敦 子
 実 子
 純 子
 茂登子
 恭 子

白雲と新樹の距離を押し測る
 注連張って乳垂り余る大銀杏
 夏めくや狐がのぞく浄財箱
 三方を若葉囲みに能舞台
 能舞台若葉の中にしづまれる
 ポンポンと壁打つテニス夏来たり
 塔頭をさへぎるやうに梅の枝
 うすやみに皮脱ぎはじむ竹一つ

青鳶のところどころに硝子窓
 恰是^{うむなると}どちやういんげん名にし負ふ
 めまとひの弄びたる青空を
 音立てて下水へ落ちる青葉雨
 防衛庁官舎昼顔咲かせしづまれり
 青煮それといふいきほひの泣うちは
 青嵐みな右手上げ招き猫
 薫風に鯉がのぼりて大志かな
 青胡桃駅の売子の木曾訛
 オレンジの内股歩行通し鴨

喜 孝
 弘 子
 喜 孝
 友 七
 泰 江
 敏 子
 美代子
 藤 穂
 喜 孝
 木 枯
 恭 子
 綾 子
 須磨子
 東亜未
 夏 子
 房 代
 藤 穂
 理 和

調

岸町公民館

初夏の箒の影のうすみどり
 植糸了へし田にくつきりと山の影

敦 子
 藤 穂

あとがき

家庭電化製品で何か一つ毀れると続いて幾つか毀れることを経験している。丁度同じやうに寿命が尽きると言ふことなのだらうか。我が家も今赤んぼがゐる夏だといふのに洗濯機が壊れてしまつた。付加価値の付いた洗濯機は便利には便利だが、価格も立派。洗濯機の前には電気炊飯器、そしてパソコンも動きが鈍くなり注文を出したところと続いてゐる。しかし体の方はお陰様でお医者様のお世話にはなつてゐないのが何よりのこと。皆様も梅雨の猛暑、体調維持の難しい季節を無事乗り切つて下さい。

何処の俳句会でも吟行地の選択には苦勞をしてをられるやうです。吟行は物見遊山と違ひ句会をするための場所を確保しなければといふ縛りがある。「あを」吟行会は少人数といふ利点を生かし、その辺りは緩やかにしてゐる。八月の吟行地は珍しく下見に出掛けてきた。一度見たところをご案内知るのは安心で私も作句の方にも力を注げる。句会場も井の頭池の池畔にあ

る茶店を予約してきた。あとは天気の良いのを願ふのみである。

「初心の頃」といふ題で原稿を募集している。四百字詰め一枚に俳句を始めた頃のエピソードをご紹介して頂き、自選句十句と共に掲載しています。

あを柳兼題

七月末日×切

「回」(回)

八月末日×切

「団」(團)

二〇一〇年七月号

発行日 七月七日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130-655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。